

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：35414

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26463401

研究課題名(和文) 思春期を対象とした子宮頸がん予防のためのアサーション教育プログラムの開発

研究課題名(英文) The development of an assertion education program for adolescents designed to prevent cervical cancer

研究代表者

奥村 ゆかり (OKUMURA, YUKARI)

日本赤十字広島看護大学・看護学部・教授

研究者番号：30403299

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、思春期を対象とした子宮頸がん予防を目指した教育プログラムの開発である。

まず、思春期の対象の子宮頸がん予防ワクチンとがん検診の現状と課題を明らかにした。さらに、子宮頸がん予防の保健行動を思春期の対象が自らとるためのアサーションの視点を取り入れた教育プログラムを開発した。生命教育と性教育の教材作成のために、中高の養護教諭や教員と連携し、教育場所や時期および内容を選択でき、繰り返し視聴できるDVDの作成を行った。実演によって提示する教育と同様に、教材ツールによっても教育効果が示された。今後も、思春期の対象の年齢や特性、地域性に合わせた教育を、継続的かつ専門的に実施していく必要がある。

研究成果の概要(英文)：The objective of the present study is to develop an education program for adolescents that is designed to prevent cervical cancer.

A survey of high school students on vaccinations and cancer screening to prevent cervical cancer indicated that the respondents received cervical cancer vaccinations at a low rate and that 30% of those who did receive the vaccine reported adverse effects such as swelling and pain at the injection site and joint pain. The results for cancer screening indicated that less than 10% of respondents planned to undergo screening. These results indicate that there is an urgent need to investigate how to handle vaccinations in the future and to provide adolescents with health education and information about vaccinations and cancer screening.

We investigated the effectiveness of the life education and sex education programs on middle and high school students, and our results suggest that the educational objectives were attained.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：思春期 子宮頸がん 子宮頸がん予防ワクチン がん検診 生命教育 性教育 アサーション

1. 研究開始当初の背景

わが国の子宮頸がんの年齢別罹患率(2005年5歳階級)は20~24歳から上昇し始め、25歳以降は急激に上昇し、40歳前後でピークに達する。さらに、子宮頸がんの発症率は年々増加しており、なかでも20~30代の女性の発症率は増加の一途を辿り、1990年代以降、各種のがんの中で最も高い発症率を呈している。子宮頸がんの原因はヒトパピローマウイルス(HPV)であることが解明されているが、日本人の一般女性におけるHPVの検出率は若年者に多く、15~19歳で約45%、20~24歳で約30%、25~29歳で約20%と報告されている。HPVの感染が20歳未満の若年者に最も多い理由は、近年の性行動の活発化により、若年齢者の性交が急増したことが原因と考えられる。子宮頸がんの予防と早期発見のために、子宮頸がん予防ワクチンの接種と子宮がん検診が推奨されている。子宮頸がん予防ワクチンは、原則として性交前に接種を受けることが望ましいため、わが国の助成金の対象年齢は中学1年生~高校1年生の女子とされている。平成22年11月の厚生労働省「ワクチン接種緊急促進事業実施要領」が出され、子宮頸がん予防ワクチン等の接種費用の助成が始まった。しかし、その後平成25年6月に、ワクチンとの因果関係を否定できない持続的な疼痛がワクチン接種後に特異的に見られたとして、副反応の発生頻度等がより明らかになり、適切な情報提供ができるまでの間、定期接種を積極的に勧奨すべきではないという定期接種の対応についての勧告が出された。この勧告により、ワクチンの定期接種がほぼ一時休止状態になるだけでなく、ワクチンによる副反応による健康被害についての情報収集と被害者の救済、ワクチンと副反応の因果関係の解明およびワクチン接種に関する今後の方向性について早急に検討していく必要がある。一方、子宮がん検診については、欧米の検診率の40%に比較して我が国は24.5%と低く、とりわけ20歳代の検診率は3.2%と他の年代に比べても極端に低い。平成21年に厚生労働省は「女性特有のがん検診推進事業」により、子宮頸がん検診対象年齢の20歳までの引き下げと無料クーポンの配布を実施し、子宮頸がん検診の受診率は少しずつ上昇してきている。しかし、未だ20歳代の低い検診率の背景には、子

宮頸がんへの認知の低さ、産婦人科受診に対する羞恥心、かかりつけ産婦人科医という認識が育まれていない等の、わが国の文化的背景にも深く影響している。

以上のことから、思春期の年代からの子宮頸がん予防ワクチン接種や子宮がん検診を促すための啓発・健康教育が重要になるといえる。厚生労働省の健やか親子21の課題「思春期の保健対策の強化と健康教育の推進」の中で、平成22年の第2回中間評価報告書によると、今後充実すべき具体的な取組方策として、性に関する教育の推進(性感染症、人工妊娠中絶の心身への影響、妊娠出産、生命の尊重等)を、学校における教育内容の充実・強化すべきこととして挙げている。しかし、わが国の学校における性教育には課題が多く、学校の授業の中での性教育に対する指導体制の確立ができていないために、性教育の内容を取り扱っていても必ずしも性教育の目標やねらいに結び付いていないのが現状である。一方、性に関する開放的な風潮の中で、性感染症の広がりや人工妊娠中絶の増加が危惧され、中・高校生に対して性交に伴うリスク予防の指導が強調され、一部の学校の性教育の「過激」「行き過ぎ」といった批判が生じ、学校の現場での性教育実践の混乱が生じている。平成17年の文部科学省の学校教育全体で取り組むべき課題(食育・安全教育・性教育)の中で、性教育を行う場合に、人間関係についての理解やコミュニケーション能力を前提とすべきであり、その理解の上に性教育が行われるべきものであって、容易に具体的な避妊方法の指導等に走るべきではないとし、心身の機能の発達に関する理解や性感染症の予防の知識などの科学的知識を理解させること、理性により行動を制御する力を養うこと、自分や他者の価値を尊重し相手を思いやる心を醸成することが重要であると意見を出している。以上のわが国の現在の性教育における現状と課題を踏まえて、新たな性教育の指導体制の構造化と指導者の育成を早急に行っていく必要がある。

2. 研究の目的

リプロダクティブヘルス/ライツの観点から、妊娠や出産年齢である20歳代、30歳代の女性の罹患率の第1位を占める子宮頸がんの予防の

ために、この保健行動をとり始めるのに最適な年齢とされる思春期を対象とした教育プログラムの開発とその効果を検証し、新たな性教育の指導体制の構造化と指導者の育成のためのプログラムの開発を目的としている。

本研究は、研究代表者を含めた看護大学の母性・助産学領域の教員4名で組織し、思春期を対象とした子宮頸がん予防教育プログラムの開発のために、以下の3つの研究課題を計画・遂行した。思春期を対象の子宮頸がん予防のためのワクチン接種およびがん検診に関する現状と認識について明らかにする。子宮頸がん予防のための保健行動を自らとることができるアサーションの視点を取り入れた教育プログラムの開発を行う。教育プログラムの効果を検証する。

3. 研究の方法

1) 研究課題

A県内の全中学生・高校生を対象として、子宮頸がん予防のためのワクチン接種およびがん検診に関する現状と認識についての自記式アンケートを作成し、郵送によって調査を行った。

2) 研究課題

(1)アサーションの視点を取り入れた教育プログラムの開発のために、アサーション・トレーニングの研修、性教育プログラム研修に参加した。

(2)A県内の中・高校生からのアンケート結果や、養護教諭および教員、市町村の保健師と、プログラム開発に向けて話し合いの機会を持ち、それぞれの意見を参考に、アサーションの視点を取り入れた子宮頸がん予防教育プログラムを作成した。

3) 研究課題

(1)学校・保健医療施設との意見交換を行い、教材や教育者向けの研修、指導方法等について洗練しながら、プログラムを構造化し、実際に思春期を対象に生命教育および性教育を実施し、効果を検証した。

生命教育の効果の検証のための測定用具

ア. 自尊感情尺度

東京都教職員研修センターと慶応義塾大学が

共同で開発した自尊感情測定尺度(東京版)「自己評価シート」を用い、自己評価・自己受容、関係の中での自己、自己主張・自己決定の3つの側面から評価し、得点が高いほど自尊感情が高いことを示す。

イ. 対児感情尺度

花沢の開発した対児感情尺度は、児への肯定的感情を示す「接近得点」と否定的感情を示す「回避得点」の4件法評価の各14項目で構成され、拮抗指数は接近得点と回避得点の相克の程度(回避得点/接近得点×100)を求める。

ウ. 生命教育実施後の調査

教育に関する理解度・感想(記述)

性教育の効果の検証のための測定用具

ア. 自尊感情尺度

Rosenbergの自尊感情尺度の日本語版は(桜井, 1997; 10項目)で、各項目について【今のあなたに最もあてはまると思うもの】を「全くあてはまらない」から「とてもよく当てはまる」までの5件法で評定を求める。得点が高いほど自尊感情が高いことを示す。

イ. 青年用アサーション尺度

玉瀬らによって作成された16項目から成る測定尺度を用いた。この尺度は、2因子(関係形成因子、説得交渉因子; それぞれ8項目)から構成されており、各項目は「必ずそうする」から「全くそうしない」の5件法で評定する。尺度の得点が高いほど、自分の感情や考えを主張すべき時に相手の立場を尊重しつつ、その場にふさわしい方法で素直に表現する能力が高いことを示す。

ウ. 性教育実施後の調査

教育に関する理解度

(3)思春期を対象とした教育ツールの開発として、中・高校生が学校内で養護教諭や教員の指導下で視聴覚的に学ぶことができる生命教育と性教育のDVD教材を作成し、(2)の実演と同様の方法で効果を検証した。

4) 教育教材の拡大・広報活動

各校の養護教諭および教諭との意見交換をしながら、実演またはDVDによる思春期への教育を実施し、効果や改善点についての意見交換を

行った。さらに、今後は教育方法の拡大のための広報活動を行い、A 県内外への教育の拡大を行い、思春期の対象の年齢や特性、地域性に合わせた教育を継続的かつ専門的に実施していく予定である。

4. 研究成果

1) 研究課題

A 県内の高校生への子宮頸がん予防のためのワクチン接種およびがん検診に関するアンケート調査から、対象となった生徒の子宮頸がん予防ワクチンの接種率は低く、ワクチン接種者の3割に注射部位の腫脹・疼痛、関節痛の副反応があった。がん検診に対して、「検診に行く」と回答した対象はわずか1割未満であった。ワクチンの今後の方向性を早急に検討し、思春期の年代へのワクチン接種やがん検診の啓発および健康教育の必要性があることが示された。

2) 研究課題

中・高等学校の養護教諭および教員と連携し、意見を聞きながら子宮頸がん予防のための教育プログラムとして、生命教育および性教育の方法を検討した。教育目的は、対象が健やかに生活を過ごすために、性に関して、生物学的側面および人間学的側面から学ぶことで、必要な知識や社会的なルールを理解すると同時に、性に対する個人の自覚を深め、自己の生き方の選択と性的意思決定を適切に行うための力を育むことである。さらに、心身の機能の発達に関する理解や性感染症の予防の知識などの科学的知識を理解することだけでなく、理性により行動を制御する力を養うこと、自分や他者の価値を尊重し相手を思いやる心を醸成することを目指している。

生命教育は、助産学生の演習とクイズ、体験によって構成した。演習の内容は、主人公を思春期の対象に設定したオリジナルの脚本を作成し、助産学生が配役となって演じた。体験は、分娩台、妊婦体験、新生児人形抱っこ、胎児の心音聴取の4つのブースを設け、全員が体験できるようにした。

性教育は、月経時のセルフケア、正しいダイエット、性感染症の予防、望まない妊娠、男女間のコミュニケーションの内容で構成した。この性教育も、生命教育と同様の方法の演習を用い、母性看護学・助産学教員が配役となって演じた。

3) 研究課題

(1) 生命教育の効果

助産学生による生命教育を117名(男子50人、女子67人)の中学生に実施した。生命教育により、中学生の自尊感情および児に対する肯定的感情を上昇させ、否定的感情を低下させる効果が検証された(表1)。

表1 生命教育実施前後の測定値の変化 n=117

測定用具		実施前	実施後	t 値
自尊感情	自己	2.72	3.08	-10.7***
	自己主張	3.27	3.43	-7.5***
	自己決定	3.05	3.23	-7.4***
対児感情	接近	31.2 ± 6.8	34.7 ± 4.5	-8.4***
	回避	7.5 ± 5.9	5.5 ± 5.7	4.6***
	拮抗指数	24.8 ± 19.3	15.8 ± 15.8	6.7***

対応のある t 検定, Mann-Whitney U 検定

***p < 0.001

各測定値の男女差は、自尊感情測定尺度の「自己」の教育による変化率と教育の理解度が男子より女子のほうが有意に高かった(p < 0.01, p < 0.001)。また、各測定値の相関は、対児感情尺度の回避得点と拮抗得点の変化率が高い生徒ほど、教育に否定的な感想を持っており(.251**, .269**)、教育の理解度が高い生徒ほど、肯定的な感想を持っており(.315**)、肯定的な感想が多い生徒ほど、否定的な感想が少なかった(-.255**)。感想の記述の総コード数は595で、男子は240、女子は355で有意な差が認められた(p < 0.01)。また、【親になるための貴重な体験】【生命の大切さ・尊さの実感】【無事に生まれてきたことの奇跡】【生命の誕生の過程について考えるきっかけ】【胎児がお腹にいることの大変さの実感】【家族への感謝】【自分や周囲の人を大切にしたい】【妊娠中の喜びや期待】などのカテゴリーが抽出された。その中で、【胎児がお腹にいることの大変さの実感】【妊娠中の

喜びや期待】【家族への感謝】は男子よりも女子の方が有意にコード数が多かった(各 $p < 0.05$)。

(2)性教育の効果

高校1年生103名(男子75名、女子28名)を対象とした性教育の効果を検証した。性教育前後の自尊感情は31.96から32.63($p < 0.05$)、アサーションは57.76から59.47($p < 0.001$)へと有意に上昇した(表2)。また、教育内容の理解度は、男子より女子の方が有意に高く($p < 0.05$)それぞれの項目では、月経($p < 0.001$)、望まない妊娠($p < 0.05$)、男女の付き合い方($p < 0.05$)が男子より女子の方が有意に高かった。

表2 性教育実施前後の測定値の変化 $n=103$

測定用具	実施前	実施後	p値
自尊感情	31.96	32.63	*
アサーション	57.76	59.47	***

対応のあるt検定, wilcoxon符号順位検定 * $p < 0.05$, *** $p < 0.001$

大学1年生100名を対象とした性教育の効果を検証した。性教育前後の自尊感情は、30.68から32.08($p < 0.001$)、アサーションは57.57から59.37($p < 0.001$)へと有意に上昇した(表3)。さらに、教育内容の理解度は、男子より女子の方が有意に高かった($p < 0.05$)。

表3 性教育実施前後の測定値の変化 $n=100$

測定用具	実施前	実施後	p値
自尊感情	30.68	32.08	***
アサーション	57.57	59.37	***

対応のあるt検定 *** $p < 0.001$

(3)思春期を対象とした教育ツールの効果

教育場所や時期および内容を選択でき、繰り返し観ることができるDVDの作成を行った。実演による教育と同様に、教材ツールによっても、教育効果が示された。今後は、各校の養護教諭および教員と意見交換をしながら、実演またはDVDによる思春期への教育を実施し、効果や改善点についての検証を行いながら、さらに、県内外への教育の拡大のための広報活動を行い、思春期の対象の年齢や特性、地域性に合わせた教育を、継続的かつ専門的に実施していく必要があると考える。

5.主な発表論文等

〔学会発表〕(計5件)

奥村ゆかり、渡邊聡美、勝田真由美、中村敦子、是澤あずさ、鈴木美恵子、中学生を対象

とした劇と体験を用いた助産学生による性教育の効果、日本看護科学学会第35回学術集会、2015、広島市

奥村ゆかり、勝田真由美、渡邊聡美、是澤あずさ、中村敦子、亀石知美、看護大学1年生に実施した演示を取り入れた性教育、日本思春期学会第34回学術集会、2015、大津市
 Nakamura, A., Okumura, Y., Katsuta, M., Watanabe, S., Koresawa, A., Kameishi, T., Suzuki, M., Efficacy of Sex Education Using Demonstrations for High School Students, The 19th East Asian Forum of Nursing Scholars, 2016, Chiba, Japan
 Okumura, Y., Koresawa, A., Ozaki, S., Sakai, M., Hirata, M., Sugino, Y., Watanabe, S., Katsuta, M., Nakamura, A., Kimura, K., & Kameishi, T., Life education by midwifery students about puberty using experiences and plays. The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars, 2017, Hong Kong
 Okumura, Y., Kameishi, T., Katsuta, M., Nakamura, A., Watanabe, S., Koresawa, A., Tanaka, S., Effects of sex education upon entering university on first-year Japanese university students, International Nursing Research Conference, 2017, Bangkok

6.研究組織

(1)研究代表者

奥村 ゆかり (OKUMURA, Yukari)
 日本赤十字広島看護大学・教授
 研究者番号: 30403299

(2)研究分担者

勝田 真由美 (KATSUTA, Mayumi)
 日本赤十字広島看護大学・准教授
 研究者番号: 70514909

(3)研究分担者

渡邊 聡美 (WATANABE, Satomi)
 日本赤十字広島看護大学・講師
 研究者番号: 10614513

(4)研究分担者

中村 敦子 (NAKAMURA, Atsuko)
 日本赤十字広島看護大学・講師
 研究者番号: 40614516